

デンマーク研修報告書 2020 年

2月14日（金）～2月24日（月）



【研修参加者】

阿部 真実(社会福祉法人 地蔵会「空と海」就労継続支援 B 型事業所 支援員)

金親 浩一(NPO 法人のぞみ グループホームすずらん 職員)

中山 岳文(社会福祉法人 新宿区社会福祉協議会 職員)

山崎 亜弥(社会福祉法人 日本キリスト教奉仕団 就労継続支援 B 型事業所 職業指導員)

— 目次 —

1 はじめに

2 研修日程表

3 研修報告書

- (1) デンマーク社会福祉施策について（講義）：中山
- (2) エグモント・ホイスコーレ見学：阿部
- (3) Fabos 福祉作業所訪問：金親
- (4) Fabos グループホーム訪問：金親
- (5) Odder 市ボランティアセンター訪問：中山
- (6) カフェ Pakhuset 訪問・トム氏との会食：山崎
- (7) 障がい者就労先（スーパーマーケット KVICKLY）訪問：山崎
- (8) Social school police(SSP)訪問：中山
- (9) 精神障がい者サロン訪問：金親
- (10) 自閉症児（者）の特別支援学校訪問：金親
- (11) Odder 市役所訪問（講義）：山崎
- (12) Ahusene 軽度知的障がい者の住宅（グループホーム・ケアホーム）訪問& Margriet 氏ホームステイ ～hygge を体験～：阿部
- (13) GAIA 美術館訪問：金親
- (14) Michael 氏ご自宅訪問 ～パーソナル・アシスタント制を学ぶ～：山崎
- (15) クリスチャニア見学：金親
- (16) エグモント・ホイスコーレ学生との交流：阿部

4 全体の感想

はじめに

今年2月14日～24日、私達4名はデンマーク福祉研修に参加させていただきました。約10日間という限られた期間で、参加者それぞれの関心事項を取り入れた多彩なプログラムを組んでいただき、現地の成人学校エグモント・ホイスコーレ、オダー市役所、ボランティアセンター、福祉作業所、グループホーム、特別支援学校など多くの施設を訪問することができました。現地では、障がい当事者の方、福祉・教育・行政それぞれの専門家の方々に引き合わせていただき、貴重なお話をうかがい、多くの示唆を受けました。

各訪問先での出会い、学習内容、所感を報告書としてまとめました。

この研修に参加する機会を与えてくださった佐々木章吾様（社会福祉法人日本キリスト教奉仕団スーパーバイザー）、コーディネーターとして現地で手厚く対応してくださった片岡豊様（エグモント・ホイスコーレ教員、NPO法人ダイアログ実践研究所理事）及び現地で私達を受け入れてくださった多くの方々に深謝いたします。

現在、世界的に蔓延している新型コロナウイルスの影響で、私達の生活様式も大きく変わりました。デンマークも私達の帰国から3週間足らずで国境を閉鎖し、外国人の入国が禁止となり、今夏開催予定だった東京オリンピック・パラリンピックも延期となりました。コロナ禍の状況が一日も早く収束し、誰もが穏やかな日常生活を取り戻せることを願います。



2020年7月
参加者一同

デンマーク研修2020年 日程表

2020年	訪問先
2月14日 (金)	成田空港→ドイツ (デュッセルドルフ) 経由→デンマーク (コペンハーゲン)
2月15日 (土)	コペンハーゲン市内見学 (市庁舎、デザイン美術館、クリスチャニア等) 移動 (コペンハーゲン→ (バス、船) →オーフス→ (タクシー) →オダー市) 約4時間
2月16日 (日)	<ul style="list-style-type: none"> ・研修概要説明 (片岡豊氏) 於: エグモント・ホイスコーレ ・デンマーク社会福祉施策の講義 (Keld氏) 於: エグモント・ホイスコーレ ・日本人留学生との交流会
2月17日 (月)	<ul style="list-style-type: none"> ・エグモント・ホイスコーレ見学 ・Fabos福祉作業所、グループホーム2か所 (軽度障害、重度障害)
2月18日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアセンター (オダー市) ・カフェPakhuset (障害者等の実習場所) ・スーパーKvickly (社員の1割が障害者雇用) 当事者にインタビュー
2月19日 (水)	<ul style="list-style-type: none"> ・SSP 学校ー福祉ー警察の連携 (コーディネーターと面会) ・精神障害者サロン訪問 ・オダー市立図書館見学 ・自閉症児の特別支援学校訪問
2月20日 (木)	<ul style="list-style-type: none"> ・オダー市役所福祉課長訪問 ・Ahusene軽度知的障害者の住宅訪問 (グループホーム、アパート) ・Margriet氏ご自宅訪問
2月21日 (金)	<ul style="list-style-type: none"> ・GAIA美術館 (精神障害者が運営に参画) ・ミカエル氏ご自宅訪問 「パーソナル・アシスタント制」を学ぶ ・21時～: エグモント・ホイスコーレの学生と交流会 (書道ワークショップ)
2月22日 (土)	<ul style="list-style-type: none"> ・障害者入所施設 (スーロン) 外観見学 ・オーフス市内 保育士 (ペダゴギー有資格) のYuko氏と懇談
2月23日 (日) ～24日 (月)	帰国 オーフス市→ (電車) →コペンハーゲン→ (航空機) →ドイツ (デュッセルドルフ) 経由→成田空港

1 デンマーク社会福祉施策について（講義）

中山 岳文

訪問日:2月16日(日)

講師：Keld 氏

講師プロフィール

- ・介護福祉士、社会福祉士、里親(2019年～)
- ・地域精神(精神障がい者の地域生活支援)の推進、児童及び障がい者施設等の監査役を経て、現在は社会福祉士の組合活動を行う。

(1) 「地域精神」概要

- ①地域精神：第85章に基づく精神障がい者の地域生活支援事業
- ②背景：ソーシャルインクルージョンに伴い、精神障がい者は入居施設から地域の住宅等へ生活の場が移行し、当事者の自立支援の充実が図られた。
- ③事業内容：「住居」「就労」「生活」の支援を柱に、アパート生活の支援や通所施設の拡充、地域における居場所の提供等を行う。事業は各自治体が運営し、主に保健師が入院や在宅生活を支援する。
※Keld氏は、精神障がい者が日常生活の中でいつでも相談ができるよう、国家プロジェクトとして夜間電話対応システムを設立。
- ④現状と課題：精神障がい者が地域で生活することを促すため、精神病棟は縮小する傾向にある。また、アルコールや薬物依存者の増加に伴い、育児が困難な親が増加しており、新たな支援策が課題。

(2) 「パーソナル・アシスタント制度(BPA)」概要

①制度内容

障がい者の自立生活支援を目的とした介護制度。利用者は、雇用主としてヘルパーを面接・採用し、「雇用契約」に基づいて介助等のサービスを利用する。ヘルパーの業務は、日常生活の介助から仕事の補助、趣味や旅行のサポートまで多岐に渡る。また、就労している利用者は、職場で業務をアシストするヘルパーを別途雇用することも可能。利用料は公費負担。
※ある利用者は年間200万KR(約3,000万円)が保障され(個々の状況によって保障額は異なる)、このうち約7割を当制度のヘルパー人件費に充てているケースもある。なお、本人の希望に応じて車椅子等福祉機器のほか自家用車も保障の範囲内で支給される。

②利用条件等

自治体ごとにケースワーカーがニーズ判定を行い、区分(2段階)に基づいてサービスが提供される。ニーズ判定には不服申立が可能であり、全利用者の約50%が立件している。

当制度の利用にあたっては、利用者の「自己決定」が尊重され、本人自らが契約や人事等マネジメントできることが前提とされている。

(3) 所感

【阿部】

講義を聞いて「生きがい」について考えさせられました。デンマークではパーソナル・アシスタント制度という制度を始めとして、障がいがあっても自分で選択する機会が設けられていますが、日本ではそのような機会が設けられていなかったり、あったとしても選択肢が限られていたりするように感じます。

パーソナル・アシスタント制度では、介助者、介助の内容、職場のアシスタントを選択することができます。これは障がい者が自立していることが前提になっているので、日本でそのまま取り入れていくことは難しいと感じます。

しかし、日常のレベルでの選択(例えば食事の食べる順序など、にんじんが先かジャガイモが先か等)でなら、介助者の考え次第でいかようにも選択する機会を増やすことができるのではないかと思いますので、少しずつ実践していくことで障がい者の自立、ひいては「生きがい」に繋げてしていきたいです。

【中山】

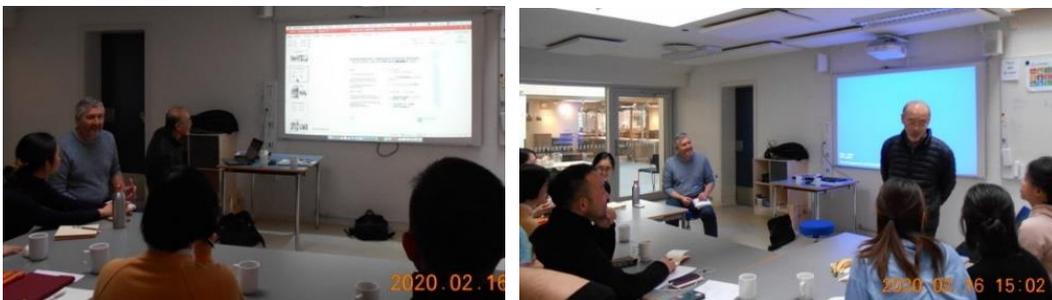
デンマークでは、当事者の「選択する権利」が尊重され、自立を支援することに重点がおかれていました。日本と比べて本人による物事を選択・決定の裁量が大きく、支援者は側面的なサポートに徹しています。日本で精神障がい者支援を推進するうえで、当事者の希望と意思を重視した支援の心構えや、切れ目のない柔軟なサポート体制は参考にしたい取り組みです。

また、同国の住宅共同組合では、賃貸住宅物件の25%は障がい者へ貸し出しすることが義務化されており、障がい者に対して仲介を拒否しないこと等(非義務)を規定する日本との制度の違いを知りました。不動産事業者へ住居支援を義務化するという積極的な体制から、当事者と地域住民との共生を視野に入れたソーシャルインクルージョンの長期的な視点を学びました。

【山崎】

デンマークにおける「脱施設化」の歴史と当事者や関係者の長年の努力と行政との連携について、体系的に学ぶ機会をいただきました。

日本でも精神障がい者の長期入院と地域社会への移行は大きな課題となっています。住民の意識改革は時間を要することですが、デンマークの経験は日本の福祉施策の参考になると思います。



Keld氏による講義
地域精神やデンマークの福祉政策について学んだ

2 エグモント・ホイスコーレ見学

阿部 真実

訪問日:2月17日(月)

講師：片岡豊氏

(1)エグモント・ホイスコーレの概要

- ・理念：1 連帯、2 責任、3 尊厳
- ・生徒数：年間で 220 人から 230 人
- ・課題：生徒の障がいの重度化と、在籍期間長期化による学校の施設化

①授業内容（見学した授業）

- ・テキスタイルの授業
- ・アフリカンダンスの授業
- ・ギターを使った音楽の授業
- ・編み物をしながら安楽死について考える授業等

②設備

学校自体がバリアフリーな作りなのはもちろん、その他にも

- ・バリアフリーのジム
- ・ロッククライミング
- ・エレベーター付きのウォータースライダー等が備わっていた。

(2)所感

【阿部】

エグモント・ホイスコーレは福祉を学ぶための学校だが、福祉の勉強を専門的に学ぶのではなく「障がいのある人のヘルパーと一緒に過ごす」ことで福祉や障がいのある人のことを学んでいくというスタイルで、その学び方や障がいをもった人との関わり方がとても自然だと感じました。必要以上に介助や手助けをするわけではなく、本人が本当に必要としている場面で手を差し伸べ、どうやったら実現できるか考えて実行している様子が見受けられ、本来の介助のあり方について考えさせられました。

日本では、たとえそれが本人の力でできることであっても、介助に関して利用者さんに関われば関わっただけ偉いというような風潮があるように思います。本人ができることを代わりに行うことで、その能力を奪ってしまっている場面が多いように感じます。老人ホームでは、痴呆症が入っていないのに、リンゴを剥きたくても包丁を持たせてもらうことすらできない現実があります。

そうではなく、基本的には「やってみよう」のスタンスで、本人が本当に必要としている場面で手を差し伸べることができると望ましいし、私はそのようにしていきたいと考えます。

【中山】

1956年に障がい者団体と協同で設立された当校は、ハンディのある方が学ぶホイスコーレとしては国内最大規模で、最重度の障がいのある学生も多数在籍していますが、そこは若者の熱気に溢れる空間でした。

デンマークでは、障がいの有無や軽重に関わらず、あらゆる手段を使って意思疎通はできるという考えが根底にあります。ある学生ヘルパーは、障がいのある学生目や指先の微かな揺れを真剣に見つめ、何度も同意を確認しながら会話をしていました。

自分自身を振り返り、意思疎通が難しいと考えるのは自分の思い込みであり、人を信じるという基本的な態度が欠けていることを学生の姿を見て改めて気付かされました。

【山崎】

ウォータースライダーやボルダリングまであるエグモントの設備の素晴らしさにも驚きましたが、障がいの有無にかかわらず自身の意志で積極的に学ぶ学生達の姿に感銘を受けました。また、障がいのある学生が「介護される人」というよりも、性別関係なくヘルパーの学生と自然な友人関係を築いているようにも見えました。

日本では受験勉強で疲弊している年頃の若者が、デンマークでは伸び伸びと人生経験を積みながら自分の進路をじっくり考える時間を持っていることを日本に帰ったら周囲の人に伝えようと思いました。



レストラン・ミーティングルーム



授業の様子



多目的ホール

3 Fabos 福祉作業所訪問

金親 浩一

訪問日:2月17日(月)

(1) 施設概要

① 重度重複障がい・重度知的障がいの方の通所施設

- ・通所者：60人（殆どが自社や他社のグループホームから通所。4人が親元から通所）
※親元から通う通所者の家族については、親御さんが子離れ出来ない為という説明をしていた。
- ・職員配置：通所10人（重度グループホーム30人／知的グループホーム15人）
※近くに自社のグループホームがあり、職員は兼務している。

② 週間のプログラム例（仕事以外）

- ・月曜：音（※）
- ・火曜：針・マッサージ・体操
- ・水曜：ボッチャ
- ・木曜：アウトドア・散歩
- ・金曜：AM 歌／PM 映画

※見学時は、『音』のプログラムを実施していた。16人くらいの通所者を3～4人（うち1人は進行係）の職員で対応。そのプログラムについては継続して同じ音源を使っている。年に2、3回音源を作った先生がきてライブでやってくれる。

※プログラム実施時は、意識して最重度の人と、動きのある少し重度の人を組み合わせている。介助の軽減の目的もあるが、その場所がダイナミックになるという考え方で組み合わせを考えている。

③ 仕事内容

- ・薪作り・運び・薪の販売
- ・木工製品作り：家具工場から端材を利用。製品4つで約2,000円
- ・芝生刈り：施設や学校など

※出来るだけ職員は、当事者だけで仕事をしてもらうよう意識して工夫している。

※職員は その人にあった仕事を見つけてくるようにしている。

(2) 所感

【阿部】

外で薪割りをしていたユーザーさんたちが印象に残っています。のんびりと自分たちのペースで作業していて、見ているこっちが癒されました。また、カメラを向けて写真を撮らせてもらおうとしたら、薪を割る機械の隣で誇らしげにポーズを決めてくれました。私も、この施設のユーザーさんのように、私の施設に通う利用者さんが誇りをもてるような仕事を生み出せるようにしたいと思いました。また、大きな機械を使う仕事でも、ユーザーさんのみで作業を行っていたことも日本ではあまり見られない光景だったので、新鮮に感じました。そこから、ユーザーを信頼して任せる職員の姿勢が見えました。

【金親】

職員の方が、動きの少ない最重度の方と、動きのある重度の方を組み合わせで対応している理由を、動きのある人がない人に関わったり、場所の空気感や活動に動き・メリハリが出てダイナミックになると言っていたのが、日本の場合、特に安全面の理由で、ダイナミックになる事を避ける傾向にあるので、興味深かったです。

自分は、同じような通所の施設で働いていて、日本では、同じ人数を3倍くらいの職員数で対応しているので、職員の少なさに驚きました。また、サービスやプログラムの数も日本の方が多くやっているような印象を受けましたが、改めて考えると、職員がバタバタ余裕なく動きまわっていて、余裕なくやっているような気がして、こちらの方が、合理的な部分もありますが、職員も無理をし過ぎず、働きながら、ひとつひとつのプログラムや対応を丁寧にやっている印象を受けました。

【中山】

木作業場には何本もの斧や刃物が剥き出しのまま設置されていました。スタッフに危険ではないかと尋ねると、「なぜ危険なのか？」と少し驚いたように聞き返されました。

これまで施設内では重大な事故は一度も起きていないとのこと。暴力や危険行為の原因は、利用者にストレスがかかっている（施設側が本人にストレスをかけている）と考えられています。利用者の仕事内容は一人ひとりの能力とスキルを重視し、ニーズに合わせた施設での過ごし方をアシストすることで、いかにストレスを軽減するかに注力していました。

問題行動においては、その人を危険視した対症療法的な方法ではなく、まずは職員自身が利用者にストレスをかけていないかを顧みて、その原因から解決していく姿勢を学びました。

「相手を信頼していれば問題ないでしょ？」と軽やかに答えるスタッフに日本とのギャップを感じました。

【山崎】

私達が訪問した際、利用者が丹精込めてつくった木工製品をプレゼントしてくださり、その気持ちと手製の鍋敷きのデザインの素晴らしさに感動しました。

作業現場では、利用者が電動斧で薪割りをしている姿や、利用者専用の喫煙所が設けられていることを知り、スタッフは利用者の意向をくみ取って、尊重していることを感じました。

音楽療法では、スタッフが終了時に利用者一人ひとりの元を廻ってその日の感想を聞き、さらに「あなたは大切な存在です」と一人一人に言っていた姿が深く心に残っています。



木作業場・薪置き場



薪割り作業の様子



木工作品



Fabos 福祉作業所外観

4 Fabos グループホーム訪問

金親 浩一

訪問日:2月17日(月)

(1) グループホーム概要

①設立経緯：知的障がいの親の会により創立

②入居者の状況

- ・重度（発達年齢5か月～12歳程度）9名、軽度～中重度13名×2
- ・入居者の年齢は18～80歳

※デンマークでは成人となる18歳で障がいがあっても親元を離れ独立する考え方が一般的。

③設備等

- ・居室全てに寝室・リビング・シャワー・トイレがついている
- ・共有部の見やすい位置に大型のタッチパネル式の液晶スクリーンがあり、職員の勤務表や写真など、様々なことが職員・入居者ともに確認出来るようになっている
- ・家賃：約8万円。半分は補助金が支給されるため自己負担は約4万円

(2) 所感

【阿部】

ユーザーさんの部屋がそれぞれに個性が溢れていてとてもクールだなと感じました。壁紙の色を自分で選べたり、部屋の仕切りを個人の希望で取り払えたり等の選択を当たり前に行っていることに感動しました。自分で選択できることが当たり前の中環境の中で生活していると、部屋のレイアウトも洗練されてくるのだと感じました。

「好き」で溢れた空間で生活できることは幸せなことだと思うし、物理的なストレスも少ないのだろうと感じました。私の施設でも今年4月からグループホームが始まったので、利用者さんにここで見てきたことを伝えたいと思いました。

【金親】

複数の方の部屋を見学させていただいたが、どの部屋にも入居者の好みの家具が置かれ、壁には家族写真や絵画が掛けられ、棚には趣味の品々が飾られていて、入居者のみなさんそれぞれに自分の空間を楽しんでいる様子が窺えました。

夜勤の人手不足は日本ではなかなか解決されない課題ですが、通所施設の職員が夜勤も対応し、勤務体系をしっかりと対応出来ていることが素晴らしいと思いました。

障がいの程度によってスペースを分けていましたが、見通しも良く、職員が行き来できるようになっていたのも、連携して、より合理的に、少ない人数で多くの利用者の人の対応が出来るのではないかと思います。

大型の液晶画面のタブレットが、見やすく、誰でも操作しやすい位置に設置されていて、職員の勤務状況・天気・思い出の写真などが、職員も利用者も常に確認出来るようになっていました。職員もそうですが、利用者さんの中には何回も確認したい方もいたりするので、素晴らしい機器だと思いました。

【中山】

スタッフの方から、施設の一部を敢えて施錠しているとの説明がありました。聞けば、デンマークの法律では、施設の外壁等を施錠することが原則禁止されているため、当グループホームでは規律の範囲内において施設独自の工夫をしているとのこと。セキュリティ重視のため、施設の施錠徹底が求められている日本と真逆の視点に驚きました。

入居者の徘徊等への対応はケースごとに様々な課題があるようですが、地域に支えられている印象でした。当事者が社会で暮らしていくうえで、個人の自己決定と自由が尊重され、周囲との信頼関係を前提にした「開放的」な考えが法制化されていることに、社会全体の信頼性の高さを窺い知ることができました。

【山崎】

ゆったりした空間で利用者さんが自分のペースで過ごせる環境が整っているように見えました。また、エントランスの掲示板がタッチパネルで、スケジュールや職員の勤務状況、利用者さんの情報や地域の天気予報まで見られるようになっていて、福祉施設でもIT化が進んでいる様子に触れ、日本との違いを感じました。

また、有資格者である管理者の方が「この仕事に就いたのは偶然だけど、利用者さんとのやり取りは面白く、毎日変化があってやりがいがある。」と仰っていたことが印象的でした。



利用者の個性あふれる居室



共有スペースに設置された大型タッチパネル



Fabos グループホーム外観

5 Odder 市ボランティアセンター訪問

中山 岳文

訪問日:2月18日(火)

(1) ボランティアセンター概要

講師：パニーレ氏（事務局常勤スタッフ）

①センター概要

- ・ 設 立：1989年（同様のボランティアセンターは現在全国 65カ所に設置）
- ・ 事業方針：福祉に重点を置いた支援と開発

②事業内容

- ・ 障がい者や難民等の職業訓練及び就労支援
 - ※センター内に併設されたカフェ（カフェ Pakhuset）の運営を通じて就労をサポート
- ・ 知的障がい者の余暇支援（ツアーや音楽鑑賞等レクリエーション）の企画
- ・ 自助グループ（ピアグループ）の運営支援
- ・ ボランティア団体の活動支援（講習会、助成金交付、活動先の紹介等）
 - ※同センター会員のボランティア団体には人材募集や広報活動の支援を行う
- ・ ボランティアの普及啓発活動
 - ※児童を対象としたボランティアの啓発、ボランティア普及のためのイベント企画等
- ・ 国や自治体への提言活動

(2) デンマーク福祉の変遷

講師：Astrid氏（ボランティアセンター理事、社会福祉士）

- ・ 1843年：憲法制定（立憲君主制）
- ・ 1915年：女性に参政権が認められる
 - ※以前の参政権は成人男性と地主のみ
- ・ 1950年代：貧困者の増加を背景に福祉国家の基盤が形成される
- ・ 1957年：障がい者支援制度の開始
- ・ 1980年代：ノーマライゼーションの普及
- ・ 1990年：市場原理の導入
- ・ 1990年代：ソーシャルインクルージョンの普及
 - ※1990年代以降、福祉の分野にも市場原理が浸透し、個人の選択の自由が尊重され、ソーシャルインクルージョンによって当事者は地域で自立した生活を送る環境へと変化した。

(3) 所感

【中山】

当センターが支援する自助グループは「誰でもリソースを持っている」をモットーに、自閉症の子を養育する親、問題行動のある児童の家族等多岐に渡ります。中でも、「障がいのある兄弟姉妹を持つ”きょうだい”」等で構成される特色あるグループがあり、多様性に富んだ活動が行われていました。当センターでは各グループのリーダーを養成するなど、当事者の自立とグループの主体性を尊重した介入方法は大変参考になりました。

また、デンマークのボランティアは、障がい者の余暇を支援する活動など、日常介助を担うヘルパーとは明確に区別されている一方、日本のボランティアはヘルパーの補助または行政サービスを補完する役割を担っています。日本では自治体の福祉財源を維持するため、施策の一部をボランティアが担うという構図から、活動者のボランティアに対する意義も曖昧となり、負担も大きく普及が進まないのが現状です。

当センターでは、ボランティアを普及していくうえで、関わる相手の人生にどのような価値が生まれるか、またボランティア自身にどのような対価が得られるかを重視していました。自他の生き甲斐を大切にしたいボランティアの精神を改めて学びました。

【山崎】

ボランティアセンターでは、スポーツを通じたイベント企画をはじめ、若者対象の人材育成や「障がいのあるきょうだいがいる児童の会」など『自助グループ』の支援にも力を入れていると聞き、各事業で当事者が主になって活動できるように「スタッフの介入は最小限に」しているという点が印象的でした。

現在、世界的にみても男女同権が実現されているといわれるデンマークでも、歴史を振り返ると女性の参政権が認められたのは男性のそれよりずっと遅く、また、実生活では未だに「潜在的男女の役割分担意識」が根強いという話も聞きました。センターの管理職は2名とも女性でしたが、彼女たちの逞しさも感じました。



Astrid 氏 (左) とパニーレ氏 (右) による講義

※写真右端：顔の表情を絵で表現したコミュニケーションボード。意思疎通が困難でもコミュニケーションができる会話ツール（ボランティア団体が作成）。

6 カフェ Pakhuset 訪問・トム氏との会食

山崎 亜弥

訪問日:2月18日(火)

(1) 就労実習カフェでノーマライゼーションの原点に触れる

理事長アストリッド氏らとボランティア・センター内の「Café Pakhuset」にてランチ会が催された。このカフェは、何らかのハンディキャップがある人達の就労実習の場として運営され、パンや焼き菓子の製造販売、ランチの提供、ケータリング・サービスを行っている。昼時で混み合うホールでは、知的障がいの方とシリアから難民として入国した女性が配膳を担当されていた。

私達のテーブルには、知的障がい者親の会の会長であるトム氏が同席された。彼は、以前、バンク・ミケルセン氏と共に働いたという。かつて、デンマークでは全国に千人規模の障がい者入所施設が約10箇所あり、トム氏は2年間その施設に支援員として勤務されていた。巨大入所施設的环境は劣悪であり、親の会は環境改善のための活動を展開し、その理念に共鳴した当時、社会省の担当官であったバンク・ミケルセン氏は「1959年法（知的障がい者福祉法）」の制定に尽力し、ノーマライゼーションという言葉の世界ではじめて法律に盛り込んだ。トム氏は「入所施設から地域社会へ移行」するため、全国的にグループホームをつくる改革を進めたが、「障がい者は怖い」という偏見から厳しい反対運動に遭い、必死で理解と協力を求めて働いたという。結果的に施設から地域社会へ移行した方は千人中750名。残りの250名は、強度行動障がいなどの重度障がいと他の地方出身で故郷に戻れない等の事情で施設に残ったという。

なお、多忙なトム氏は地元のコーラスグループの世話人でもあり、隣室で練習に参加するため早々に席を立たれた。デンマークでは、ナチスからの解放日の5月4日に毎年、反戦をテーマにコーラスの発表会を開催しているという。自称「日常活動家」のトム氏は「反戦をマスコミに訴えることも大切だよ。」と笑顔で去って行かれた。

(2) 所管

【中山】

店内は地元住民で賑わい、住民と当事者のスタッフはお互い顔見知りで、まさにインクルーシブな空間でした。就労実習の役割は、仕事に必要なスキルの習得だけでなく、日常における地域住民とのコミュニケーションや混ざり合いの機会を創り出すことであると実感しました。

【山崎】

思いがけず、生き証人からノーマライゼーションの原点に触れる時間を共有させていただき、現行の福祉サービスは決してお膳立てされたものではなく、当事者・関係者の長年の努力の結晶であることを改めて学ぶ機会となりました。



親の会会長のトム氏

ボランティアセンター及び併設カフェ訪問

7 障がい者就労先（スーパーマーケット KVICKLY）訪問

山崎 亜弥

訪問日:2月18日(火)

(1)KVICKLY 訪問

トム氏らとの会食の後、アストリッド理事長の紹介で、odder 市内の大手スーパーマーケット KVICKLY で働く女性を訪ねた。このスーパーは、デンマーク国内に複数のチェーン店を有し、品揃えが豊富で清潔感のある店舗。

貴重な休憩時間を私たちの訪問対応に充ててくださった女性・ラウスさんから、売り場の一角でお話を聞かせていただいた。彼女は、品出しの仕事に19年間従事されている。何度も首の手術を受ける障がいがあり義務教育のみ受けて就職し、周りの人達に支えられてフレキシブルな働き方をさせてもらってきたと話された。

彼女に「長く働くことの大変さと喜びは何ですか?」と質問すると、「大変さを考えたことはない。喜びは、とても優しい人達と一緒に働けることと優しいお客さんに出会えること。」と澁刺と答えられた。

このスーパーマーケットでは、社員240名のうち1割が障がい者雇用だという。

(2)所感

【中山】

当店舗では、スタッフが障がいのある方の仕事内容を把握し、状況に応じて仕事を補助したり配置を変えるなど、柔軟なサポートが徹底されているとのことでした。

「はじめの頃は手術をする度に解雇される不安があった。」と語るラウスさんをはじめ、このような不安を察知しサポートする、企業のきめ細やかな配慮を感じました。ラウスさんの他にも勤続年数40年を超える当事者の方がいらっしゃるのも納得できました。

また、難民やホームレスの方が収益を得るため、店内では当事者による情報紙の販売も認可されており、サポートが必要な方々を地域ぐるみで支援する風土も参考になりました。

【山崎】

スーパーで生き活きと働くラウスさんの言葉から、「働く幸せ」について大きな学びをいただきました。長く勤務する間には、実際にはさまざまな苦労があったと思います。「大変さを考えたことはない。」という回答は想定外でした。周囲の人への感謝と自分の仕事に誇りを持って取り組まれている姿に触発されました。



就労先のスーパー訪問 ラウス氏（中央）と

8 Social school police (SSP) 訪問

中山 岳文

訪問日:2月19日(水)

講師:Christian氏(Odder市麻薬課)

(1) SSP 概要

- ①設立:1970年代(国内の各自治体に設置。以後デンマークが発祥となり欧州各地へ普及)
- ②経緯:路上生活する少年の増加や犯罪者の若年化を背景に、警察・福祉・教育の三分野の連携体制が構築され、組織間の情報交換や協力関係が強化されるなど、犯罪予防に向けた法整備が行われた。
- ③事業:少年の犯罪予防と更生支援、青少年学校(放課後支援)の運営。その他、セミナー等の実施(未成年者を養育する親を対象にした飲酒への対処方法等)

(2) 少年犯罪の現状と支援

- ①現 状:数年前は未成年者による犯罪率の増加(日本の約5倍)が課題であった。近年、犯罪件数は減少傾向にあり、犯罪年齢は高年齢化へ転じ、アルコール・麻薬中毒者も減少している。一方、児童ポルノ等デジタル犯罪が増加し、新たな法整備が課題。未成年者による犯罪の要因は、両親の放任主義(子の自由が尊重される文化的背景)、未成年の飲酒等が挙げられる。※未成年者の飲酒量はEU圏内最多
- ②支援体制:10歳以上の犯罪は原則司法対応。15歳未満の少年には福祉的ケアで対応し、10~14歳の少年にはSSP等の更生機関が支援にあたる。

(3) SSPにおける支援の事例

①非行グループリーダーへの対応

- ・状況:14歳少年(シリア難民)は非行グループの中心人物であり、不登校の状態であった。
- ・対応:本人と何度も対話を重ねながら非行の原因を追究し、学校や家族関係等生活全般の支援をコーディネート。少年と不仲だった両親とも協議し、本人を親戚の家に預けることで合意を得、安定した生活が送れるよう継続してサポートしている。

②非行グループへの対応

- ・状況:複数の少年らによるバイクの危険運転等が地域の脅威となっていた。
- ・対応:SNS等を活用して少年らメンバーを探し出し、本人や家族を集めて警察も交えた話し合いを重ね、親同士の連絡ネットワークを構築。少年達にバイク運転を禁止することなく、本人及び家族と運転に関するルールを決め、遵守することを約束した。

(4) 所感

【阿部】

事例をいくつか伺った中でも、非行少年たちの例が印象に残っています。非行を止めさせる対策のひとつとして「親が実際にスクーターに乗ってみる」さらに、「バイクの改造の仕

方も教わる」という案が親の中から出たとのことでした。というのも、子供たちにとってスクーターは必要不可欠なものであるので、奪うことはしたくないという思いがあったからだそうです。奪ったり取り上げたりすることは簡単なことですが、同じ視点に立って考えたり寄り添ったりすることはとても難しいことだと思います。親や教師、支援する側と支援される側のように上下関係が生まれてしまう時にこそ、デンマークの親の姿勢を忘れないようにしたいです。

【金親】

所長のクリスチャン氏の支援の実例の紹介がとても印象深かったです。問題行動のある少年達への支援も、本人だけでなく、家族や地域も巻き込み、頭から否定するのではなく、本人の実情も尊重しながら、丁寧に丁寧に問題の解決を図る姿勢、そして問題行動がなくなった後の地域への周知活動を徹底し、アフターフォローもしっかり行う姿勢は素晴らしいと思いました。

【中山】

当センターでは、非行少年本人とその家族が、可能な限り自分たちの力で問題を乗り越えていけるよう、更生を前提とした福祉的アプローチと教育支援に重点が置かれています。警察・福祉・教育がヨコの連携をとり、“親と子の関係性”を支援の軸にして、本人や家族の自立を支える一貫した方針が徹底されていました。

また、未成年であっても個人の自由が尊重される同国では、支援者の権威的な関わり方では効力がないことから、問題の原因追求から解決に至るまで、一貫して「対話」によるアプローチがなされており、当事者との密接な関わりを通して解決の糸口を探るプロセスが重視されています。非行少年をすぐに罰する（悪と決めつける）のではなく、本人や家族の「良いところ」「必要なもの（本人が大切にしているもの）」を対話によって把握し、支援の核にしている点は、福祉に限らず人と関わるうえで重要な視点と感じました。

さらに、更生を目指す少年達を地域に理解してもらえるよう働きかけるなど、社会全体で支援の連帯をつくり出すソーシャルワークの重要な姿勢を学びました。

【山崎】

デンマークの未成年者の犯罪率が「日本の約5倍」というのは意外でした。公的支援が多く、経済的な心配がなくても心は満たされない、人は孤独に弱いということなのか、と考えさせられました。

福祉担当者としてクリスチャン氏が心がけていることは「善い人生を送れるように支援すること」、そのために「罰するのではなく共に学ぶ姿勢」と仰っていたことが印象的でした。



SSP 構内



Christian 氏（中央）



9 精神障がい者サロン訪問

金親 浩一

訪問日:2月19日(水)

(1) 概要

- ・精神障がいの当事者が発信していくネットワークカフェ。市の予算で、家賃とスタッフ2人の人件費を出しているが、なるべく職員が関与しないようにしている。職員の役目は、当事者が主導権を持って物事を進めるのをサポートする事と考えている。例えばFacebookグループで企画する場合も、職員が意図的に入らないようにしているなど。
- ・ボランティアの人は、どうしてもやってあげてしまうことが多く、当事者が主導権を持ちにくくなるので、意図的にいれないようにして、障がいを持っている人ひとりひとりが、必ずなにかしらのリソースを持っているので、そのリソースを使ってもらうようにしている。例えば、陶芸というリソースを持った人が、このカフェで練習して他の場所でも出来るようにするなど。

【ルール（当事者同士の話し合いで決めている）】例

- ・7時～23時まで使える（※当事者も鍵をもって出入り自由）
- ・喫煙はダメ
- ・アルコールはダメ（自分のリソースを使って発信していく場所の為）
- ・犬はダメ（ホームレスの人は犬を連れている人が多く、ホームレスの居場所になる為）
- ・子供はだめ（育児で大変な人たちが、子供から離れたくて来ている場所でもある為）など

(2) 所感

【金親】

職員はいるものの、関与しないようにしている感じが、とても徹底されている印象を受けました。日本であれば、何かあった時の事を必要以上に心配して、出来ない決めつけて、職員がいないときの出入りなどを制限してしまうのではないかと思いますと同時に、その徹底した姿勢があるからこそ、当事者が自分たちで考え、ルールを決めてしっかり運営することが出来ているのではないかと思います。

【中山】

突然の訪問でしたが、先客の利用者の方々にも快く迎え入れてくださったそこは、特別な敷居を感じさせない、街中にあるカフェそのものの空間でした。

しかし、オープンな雰囲気でありながら、利用者で決めたルールは徹底されており、中でも酒類は禁止するなど、アルコール依存症の方への対応には明確なラインが設けられていました。（アルコール依存症の方はスタッフが専門機関を紹介し、繋ぎの支援をしているとのこと）。

当事者の方々の発案でスタートしたという当カフェは、自らの居場所を確保するために様々な約束事が遵守され、スタッフのきめ細やかな側面的支援があるからこそ、地域との共生が実現できているのだと感じました。

【山崎】

商店街にあるビルのひとつが精神障がい者のサロンになっていて、地域に溶け込んでいる印象を受けました。管理スタッフは2名で、彼らの人件費とビルの賃貸料は公費負担されていると聞き、行政サービスが行き届いていることを知りました。

このサロンは、お茶を飲むスペースだけでなく、就労準備の場でもあり、陶芸やガラス細工の工房も併設されていました。少々驚いたことは、玄関から見える利用者用キッチンの壁に、複数の包丁が貼り付けられていたことです。日本なら刃物は見えない所に保管すると思います。利用者を信頼している証なのでしょう。スタッフは脇役に徹し、利用者が主体的に動けるようにサポートし、対外的な案件で仲介する必要があるときに関わるようにしていると聞きました。



カフェのような憩いの空間



サロン奥にある工房



様々な美術工芸品



サロン外観と作業場

10 自閉症児（者）の特別支援学校訪問

金親 浩一

訪問日:2月19日(水)

(1) 学校概要

①利用者の状況

- ・自閉症や拒食症やADHDの方など14～23歳の方が通所や入所という形で生活しており、24名の方が通所している。
- ・大人になったら、自立した生活を出来るようになる事を目標としている。

②学校について

- ・この学校にたどり着くまでは、いじめられたり、悪い学校体験を持っている子供が多いので、家庭の部屋のような雰囲気为学校にしている。
- ・ひとりひとりの好みや状態に対応出来るように様々なスペースを用意している。

③プログラム内容・設備等

- ・マッサージ:2人の保育士は、マッサージ師の資格も待っていた。マッサージの目的は、生徒が自分の身体とコンタクトが取れない人もいるので、その為もあるとのこと。
- ・ロールプレイゲーム:ゲームの中で何かを決出したりする事も学ぶ。
- ・VRルーム:様々な場所や状況を体験したり、練習する為に使用。
- ・音楽:スタジオのように様々な楽器を準備していた。音楽を通じた授業の成功率が高いとの事で、発表の為にライブもあるとの事だった。その他、レゴやジムやPCのための部屋など、様々なスペースが用意されていた。
- ・通常授業以外にも安心した環境の中で作業したり食事の準備をする練習も行われていた。
- ・年齢によって、企業に実習にもいくとの事だった。

(2) 担当者した先生の話

- ・基本的に生徒達は、周りとの良い関係を作りたいと願っている。『問題と呼ばれる行動』があるとすれば、原因は環境や職員の中にある。
- ・『大人になって自立するには「自律」を学ぶ必要がある』。内側から制止する事を学ばなければならない。
- ・みんなと同じ環境で生活するには、ひとりひとり異なった対応をする必要がある。例えば、21時に寝ないといけない子と、23時に寝ないといけない子への個別の対応など。

(3) 所感

【阿部】

日本だと自閉症の児童・生徒が所属する特別支援学級はあっても学校はないので、自閉症の学校が単体で存在していることに驚きました。コミュニケーションをとることに慣れるためにレゴやボードゲームを使った授業が行われていたり、人に触れたり触れられたりすることに慣れるためにマッサージを行う部屋が設けられていたりして興味深かったです。

校長先生の話の中で「若者たちは良い関係を築きたいと思っている」ということを前提として、何かあったら本人をとりまく環境や職員、学校の問題であるという意識があるうえで支援をしている姿勢が見えました。このことから、問題行動があったとしても支援の仕方や環境に問題がなかったか振り返る視点を持つことが大切だと感じました。

【金親】

障がいを持つ方がどうしたら快適に過ごせるかという事を本人も含めた『ダイアログ』しながらすすめていく、様々なパターンのモノや部屋を用意した『徹底的な環境整備』、日本では目を背けがちな『性』の事にしっかり向き合うなど、日本でも取り入れたらいいのではと思うことが沢山ありました。

【中山】

日本では自閉症児・生徒の殆どは普通校に通い、同じ学校で一緒に過ごすことが好ましいという見方があるため、当校のように普通校と隔てた教育の仕組みには「共生」と逆行する印象を抱いていました。

しかし、日常生活から進学、就労支援まで一貫してサポートする当校の徹底した個別支援の根底には、一人ひとり異なる症状や過去の経験、そして本人の意思が最大限に配慮されており、やがて社会で生活していくための入念な支援の場であることが理解できました。

日本のように「共学が望ましい」とする、支援者側の一方向的な視点が、実は本人のストレスや不安を煽っているのではないか、また自身が行う支援は本当に本人の意思を尊重しているか、自らの姿勢についても深く考えさせられました。

当校で過ごすうち、生徒の方々はやがて友人や恋人もつくり、人との接し方も学んでいくとのこと。男女が身を寄せ合って笑いながらゲームをする姿は、私が抱いていた自閉症という印象とは大きく異なるものでした。

【山崎】

生徒に個別対応できる整った環境と高額な費用が公費で賄われていることに驚きました。また、入学条件「IQが標準以上あること。他害しないこと。」について、校長に「入学後に他害した場合どう対処されますか。」と質問した際、「退学処分です。実際にこの10年で2名が退学になりました。保護者に規則を改めて認識してもらう必要があります。」と答えられたのが印象的でした。日本の福祉施設でも「他害や破壊行為」に苦慮するケースが多いが、一旦受け入れた利用者を規則だからと退所処分にするには実際には少ないのが現状です。規則遵守の姿勢と集団生活の場での安全確保の重要性を改めて考えさせられました。



個々の趣向に合わせた教室



VR 専用ルーム



LEGO・ボードゲームルーム



開放的な中庭

11 Odder 市役所訪問（講義）

山崎 亜弥

訪問日:2月20日(木)

講師:Britta氏(odder市福祉課長)

(1) 講義概要

odder市役所を訪問し、福祉課長 Britta 氏から福祉施策の現状についてレクチャーを受けた。

同市では、2017年に行政改革を行い、組織再編、施設や病院の統合の他、複雑化するニーズにタイムリーに対応するため、相談窓口を一本化して市民サービスの向上に取り組んでいる。

市議会で合意された〈核となる課題〉は、「市民は自分の人生を自分で管理する」、有効なプロセスは、次の3つ。(1)自分の人生に寄与しようという積極性、(2)ベストな成果のために共同で働く、(3)在宅重視:最小限の行政介入で地域社会で暮らす。

レクチャーで配布された資料の表紙のデザインは、被支援者と市内のアーティストが描いたもので「善い人生とは何か」をテーマにしている。ここには「連帯、安心、仕事、家族、仲間、余暇」が表現されている。

Britta氏が率いる福祉課では、高齢者以外の各種福祉サービスを所管している。近年は、発達障がいや拒食症、うつ病などの若者が増加傾向にあり、支援を要する者の低年齢化への対応が課題の一つだという。青少年担当部門では15~30歳を対象にしている、(1)若年者の失業、(2)人間関係のトラブル、(3)学校教育の中断者への支援をしている。

レクチャーの後、Britta課長とボランティアセンター理事長のAstrid氏、片岡氏と私達研修参加者とで市役所の職員食堂で会食をした。Britta氏は10代の子ども2人を育てるワーキングマザー、Astrid氏は成人した子ども3人の母親。デンマークでは管理職に就く女性が多いが、彼女達に働き方を訊ねると、勤務時間が決まっっていて日本のような長時間労働をしないことが子育てとの両立を可能にしているようだ。また、デンマークが“世界で最も幸せな国”といわれるのはなぜかと訊ねると、「日常、支援を必要とする人達を対象に仕事をしているので、その実感はない。」と答えられた。しかし、「あなたは幸せ？」との問いには、「幸せです。やりがいのある仕事と家族がいるから。」と話された。

(2) 所感

【中山】

個々の支援計画を作成する際、障がいや病気の診断名を明記せずに、また障がいの種別によって区別することなく、その人のニーズに応じて支援にあたるとのこと。当事者のスティグマに深い配慮が感じられました。また、市の財政を決定する際、対象者の「数」を根拠にするのではなく、具体的な「課題別の対策」を根拠にする視点も大変参考になりました。

【山崎】

限りある財源を「共生の精神」で上手く運用していこうという行政の姿勢を学びました。また、税金が高い反面、公費により生活上の経済的な保障があるデンマークでも、日本と同じような社会問題が山積していることを知り、福祉のジレンマについても考えさせられました。



odder 市役所



「善い人生とは何か」を
テーマにしたポスター



SNS に掲載された訪問記事

12 Ahusene 軽度知的障がい者の住宅（グループホーム・ケアホーム）訪問& Margriet 氏ホームステイ ～Hygge を体験～

阿部 真実

訪問日：2月20日(木)

講師：Margriet 氏

(1) グループホーム概要

- ・軽度知的障がい者のグループホーム、人数は約 10 名
- ・家賃 8 万円、そのうち半分は補助金で賄われる
- ・7 時 30 分から 22 時の間は職員が滞在している

(2) ケアホーム概要

- ・20 名のユーザーがいる
- ・金庫あり。休憩室は共同スペースの役割も果たしている（休日の朝・昼食はここで食べる）
- ・家賃は 4 千クローネ（約 8 万円）で半分は家賃手当をもらっている

(3) 所感

【阿部】

ユーザーのみなさんは自立していました。タバコが好きでディープな雰囲気のある部屋があれば、自分で描いた絵を飾っている部屋があったり、部屋にも個性が出ていて興味深いものがありました。どの部屋にも共通していたのは、アート作品が部屋に飾ってあることです。アートが生活の中に組み込まれることで、生活に彩りが出たり、心の豊かさに繋がったりするというような効果が生まれるように感じました。

部屋を見せたくて仕方がないユーザーもいれば、その逆に絶対に見せたくないというユーザーもいました。その良くも悪くも自分中心な感じが、私の働いている施設の利用者さんと似つかわしく、とても親近感が湧きました。ここの施設のユーザーとの関わりを通して、障がいのある人は世界共通であると感じました。異なっているのは、彼らを取り巻く周りの環境だけではないかと思います。それによって、一方では自分の好きなものに囲まれた自立した暮らしができていますが、もう一方ではそれが実現できていない状況が生まれています。デンマークの制度や福祉に対する考え方を日本にそのまま取り入れることは不可能かもしれませんが、個人レベルで取り入れていければ、少なくともその周りの利用者さんはもっと可能性が広がっていくのではないかと感じます。具体的には、利用者さんの意思を尊重することを第一に行動したいと思います。利用者さんのやりたいこと、好きなことを引き出し、それをどうやったら実現できるか一緒に考えて取り組んでいきたいと思っています。

【中山】

グループホームやケアホームの各部屋は入居者一人ひとりの「家」であり、スタッフはサポートを必要とするか否かを本人の判断に委ね、支援を望む時にだけアシストするよう自立の補助に徹しているとのこと。

入居者は職場やアクティビティセンター、ホイスコーレ等それぞれの場所へ原則公共交通機関を利用して通っており、ケアホームに住むある男性は、自ら車を運転して職場に通い、将来のために貯蓄もしていました。手厚い福祉サービスの維持においては、当事者が望むサポート（本人の意思）を重視することと、本人にも自立の精神が醸成されるよう働き掛けることが、効率的な福祉サービスを維持できる重要な要因と感じました。

グループホーム見学後、Margrietご夫妻の夕食に招待いただきました。同氏の自宅をはじめ周囲の建物など100年以上前の建造物が現在も大切に使用されており、また「自慢話をする人は、デンマークで生きていけない」という昔から伝わる掟など、今も受け継がれるデンマークの伝統を見聞きする貴重な機会でした。何より、家族仲良しの秘訣は「お互いを尊敬すること。」と教えてくださった素敵なお夫妻を、私も家族の手本にしたいと思います。

【山崎】

グループホームでは、天井が高くゆったりしたフリースペースで利用者がくつろぎ、個室には好みの家具、壁には家族写真や絵画が飾られて、喫煙者は空気清浄機を付けることを条件に個室での喫煙が認められているなど、日本との違いを感じました。

隣接するケアホームでは、70平米の部屋で一人暮らしをする男性が自室を案内してくれて、ボーリング大会で優勝した金メダル、そして愛車を得意げに見せてくれました。知的障がいがある彼は、運転免許を取り、自分で車を運転してアルバイト先のカフェに通っていると聞き、驚きました。障がいの有無にかかわらず、目標をもって自分の人生を楽しんでいる様子を日本の人たちにも伝えたいと思いました。

また、この日の夜は、ホーム職員のMargriet氏のご自宅に招かれ、デンマークの文化「ヒュッグ(HYGGE)」を体感させていただき、趣味を楽しむアトリエもある夢のような素晴らしいご自宅を拝見し、ご主人との心豊かな暮らしに感銘を受けました。デンマークが「世界で最も幸せ」という調査結果が出る理由を質問すると、「Danish modesty」と仰っていたことが印象的でした。



利用者自慢の居室



多目的スペース



入居者の方々と書道で交流



Margriet 夫妻の自宅にて

13 GAIA 美術館訪問

金親 浩一

訪問日:2月21日(金)

(1) 美術館概要

① 施設概要

- ・運営：ラナス市
- ・美術館・デザイン部・メディア部・クリエイティブ部・カフェ・ブティック・美術学校などの部署から成り立っている。障がいのある人も運営に携わり、雇用もしている。
- ・『特別なニーズを持つ人たちにとって適した場所で、意義のある仕事を提供する』という事を大事にしている。

② 業務内容

- ・美術館：3障がい（身体・知的・精神）に関わらず、枠を超えた人達のアート400作品を展示している。特別な展示スペースも用意しており、そこでは年4回の特別展示も実施している。
- ・デザイン部：ブティックなどで売っている製品づくり・用務員業務（電球の交換・庭の手入れなど）・外部の仕事もしている。
- ・メディア部：名刺やチラシの仕事をしている。
- ・クリエイティブ部：ブティックなどで売っている製品づくり・清掃業務などを行っている。
- ・カフェ・ブティック：地域の人も利用できる店舗。職員がサポートしながら、障がいのある人もスタッフとして働いている。
- ・芸術学校：19名のアウトサイダーアーティストが働いている。国内に限らず海外の展示もある。アーティストとしての作品制作だけでなく展示のサポートの仕事もしている。職員は保育士資格を持つ人が多く、芸術学校出身の人が、当事者がどういうテーマで作品作りをやるか決めて支援している。

(2) 所感

【阿部】

美術館だけでなく、学校があったり、作業場やカフェがあったりして美術館という枠では収まらないような場所でした。アート作品を生み出すユーザーさんもいれば、壁のペンキを塗り直す用務員の役割を果たすユーザーさんもいて、ひとつの施設の中で自給自足をしているような印象を受けました。ガイアミュージアムでは仕事に誇りをもつことを大切にしていると言っていましたが、どの作業をしているユーザーさんも生き生きと仕事をしている印象があります。美術館という社会に開けた場所を軸として、ユーザー自身が社会との繋がりを感じながら仕事をできていることが大きな要因としてあるのかもしれないと感じました。

【金親】

『その人が、何が出来るかということ、常に試している。』と担当の方が話していました。デザイン部で、職員の方に、アートに関わる仕事のみではなく地域の業務をやる理由について訊ねた際も、『創作的な活動は単純作業になりがち、仕事を通じて、社会の一員になる事も大

事。』と言っていたのも、その意識からくるものだと思います。

また、メディア部では、職員が、音楽の好きな障がいのある人に対して、ギターを弾きながらコミュニケーションをとっている場面もあり、ひとりひとりの障がいのある人に時間をかけて、丁寧に対応している印象を持ちました。

【中山】

ラナス市が運営する当ミュージアムでは一般就労も支援しており、自閉症の方はIT企業に就職するなど、その人の能力や可能性が十分に配慮されたマッチングが行われていました。さらに、企業は実習の受け入れを拒否することが禁止されている等、官民が協働して当事者の社会参加・就労を促進する取り組みも大変参考になりました。

また、「第三の関心ごと」という当ミュージアムで大切にしているコミュニケーション方法は、新しい人と出会った際、共通の関心ごとを見つけ出しコンタクトを深めるというもの。通所を渋る対象者には、ランニングという共通項をもとに「トレーニングウェアを着て来て」と誘い出し、一緒にランニングをするなど、相手と歩調を合わせるという基本の心構えを改めて学びました。

【山崎】

障がいをもつ人達がアーティストとして活躍する他、ミュージアムの運営にも参画して、アートだけでなく学校の清掃や物品の配達など地域での就労も行い、併設のレストランには一般客も来館する環境整備に感心しました。配達業務では、精神障がいをもつ利用者が職員の同伴なしで車を運転して配送作業を行なっていると聞き、驚きました。全般的に、「利用者主体で働けるよう」に敢えて手を出さずに見守る職員の姿勢は、日頃の自分の働き方を改めて考える契機になりました。



美術館内の展示作品



工房



館内に併設されたカフェ



アウトサイダーアーティスト（パネル）について説明するスタッフ



14 Michael 氏ご自宅訪問（講義） ～パーソナル・アシスタント制を学ぶ～

山崎 亜弥

訪問日:2月21日(金)

講師: Michael 氏

(1) 講義概要

オーフス市内のアパートでひとり暮らしをされている Michael 氏のご自宅を訪問させていただき、ご自身の経験からパーソナル・アシスタント制（以下「BPA」と表記）についてお話を伺った。同氏は、脳性麻痺で介護を必要とするため BPA を利用し、教員として 16 年間勤務する他、神学部出身で教会区の信者会の会長も勤めておられる。

BPA は、1970 年代後半から 80 年代にかけて人口 30 万人のオーフス市で始まり、筋ジストロフィーの方々の努力によって 1987 年に「生活支援法」第 48 条第 4 項として規定され、全国的な制度に発展した。Michael 氏も BPA 制度創設に関わった人物の一人であり、エグモント・ホイスコレで BPA の授業を受け持たれている。この制度は、障がい者が地域で自立生活を送るため、介護者を自分で直接、雇用・解雇でき、介護費用を公的機関が補償するもので、2018 年時点で全国で約 2,200 名が利用している。利用には「認知的に人事管理できること」と「教育、就労、ボランティア活動など何らかの社会的な活動を行っていること」の 2 条件を満たす必要がある。契約に関しては、民間団体等に委託することも可能。ヘルパーの公的条件は「18 歳以上」だけであり、それ以上は雇用者が設定する仕組みとなっている。

Michael 氏は、人事管理も全て自分で行ない、8 人のヘルパーを雇って週 168 時間（1 日 24 時間）介護を受けいる。同氏が設定するヘルパー雇用の条件は、(1) 同氏の発語を聞き取って伝えられること、(2) パソコンが使用出来ること（口述筆記のため）、(3) 車の運転が出来ること、(4) 相性（但し、この見極めは難しいという）の 4 事項。ヘルパーを募集した際には、80 名もの応募があったというが、それは同氏の人柄によるものと思われる。私達が伺った際に、夕方の交代時間をはさんで 2 名のヘルパーにお会いしたが、双方 20 歳前後の好青年であった。若い人が自然体で介護を担っている姿から、デンマークの未来は明るいと感じた。

(2) 所感

【中山】

高校時代、介助を友人に依頼していた同氏は、友人とは対等な関係にはなれなかったと当時を振り返る一方で、現在は教師として、またヘルパーと対等なビジネスパートナーとして自立され、「自己決定」によって人生を謳歌されている姿が印象的でした。

ただし、自己決定に伴う責任のリスクや、人材豊富な都市部と人手が少ない地方では、ヘルパーの確保に格差があるとの指摘もありました。また、人事の管理能力が当事者に必要とされる当制度では、自身でそれが行える当事者とそうでない当事者との間に、「自立とは何か」という問いも生じるように思います。手厚い保障は自立を妨げてしまう可能性もあり、デンマークにおける自立（自己責任）と保障とのバランス維持について、新たな関心を持ちました。

【山崎】

Michael 氏にお会いするまでは「重度障がいがあってもひとり暮らしをする」ということが想像出来ませんでした。仕事もして、海外旅行（アフリカ他）にも出かけ、好きなワインを嗜み、自身が望む生活を前向きに実現させておられる同氏の姿に勇気をいただきました。



Michael 氏（中央）と BPA ヘルパー（後方左端）

15 クリスチャニア見学

金親 浩一

訪問日:2月15日(土)

(1)概要

クリスチャニアは、デンマークの首都コペンハーゲンのほぼ中心に位置する自治区。人口約1,000人、面積約34ヘクタール。町というより小さな村のような場所。運河と小さな湖に挟まれ、木々が青々と生い茂る。都心部とはまったく異なる、ゆったりとした時が流れていた。

クリスチャニアの一番の特徴は、アムステルダム（オランダ）、イビザ島（スペイン）と並んで、ヨーロッパに現存する有名なヒッピーコミュニティであること。デンマーク政府から独立したルールで社会がまわり、強力な自治権とともに独自の国旗や国歌さえも持つ。その一方で、市民は政府に税金を納め、他の国民と同様の手厚い社会福祉も受ける。そんな不思議なダブルスタンダードによって成り立っている。

(2)所感

【阿部】

今回の研修の中で一番緊張感のある場所でした。大麻が日常的に売られている場所とホームセンターや幼稚園などの私たちの日常にもある場所が混在しているのが不思議な感覚でした。未だにここを訪問した時の感情を消化しきれていませんが、「闇」の部分にも触れることができたのはとても貴重な体験だったと思っています。

【金親】

宿泊したコペンハーゲンの駅周辺の整った街並みは、とても素敵だが、少し整いすぎた印象を持っていました。その為、クリスチャニアにいったときは、アートと自然があふれていて、雑然としているけれども、とてもピースフルな空気であふれ、自然な感じがしました。犬もノーリード（※人間と同じように犬の自由も尊重しないといけないので『犬を鎖でつないではいけない』という決まりもあるようです）で過ごし、家も個性的なものが多く、市街地と別な意味で、とても刺激的な時間を過ごしました。

そして、自転車好きな自分の一番のお気に入り、クリスチャニアバイク（前輪に大きなカゴがあって荷物を置いたり、子供や大人も座れる自転車）！！日本にいる時から知っていましたが、デンマークに来てからも様々な種類のものを見ましたが、前の大きなかごに、笑顔の女性と子供を乗せたクリスチャニアバイクを、男性が颯爽と漕いでいる姿を見た時には、なんて素敵なんだろう！！と感動しました。こんな自転車がクリスチャニアで生まれたと聞いた時には、こういう自由でピースフルな場所だから、こんな素敵な自転車が生まれたのかなあと思うと同時に、こういう場所を無くさず、共存しているデンマークの国としての懐の深さを感じました。

【中山】

その空気は経験したことのない“別世界”でした。クリスチャニアでは、大麻や麻薬といった「違法」なものは認められる一方、「暴力禁止」というルールが厳守されていることについて、相反するルールが共存していることがなかなか理解できませんでした。

しかし、世間的に違法なものはさておき、自らが住む地域は自らで約束事を決め、個人の自由を尊重し、かつ安心した暮らしを維持する、自治の強い力を感じる場所でした。

立ち寄った売店で、近寄り難い雰囲気店の店員の方から「“Thank you”は日本語で何というの？」と笑顔で話しかけられた時は戸惑いましたが、ふと気持ちが軽くなる一瞬でした。

【山崎】

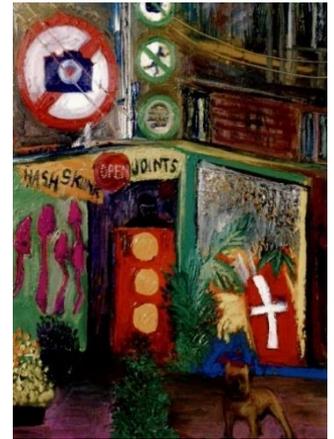
古い町並みが美しいコペンハーゲンの散策の後に訪れたクリスチャニアは、他とは全く違う空気が流れていました。非合法の麻薬が路上で公然と売られ、素人目にも薬物中毒と分かるような人々が険しい目つきで歩いていました。一方で、クリスチャニア・バイクという三輪自転車を製造する工房があり、デンマーク全土に普及するほど人気のブランドになっていたり、住民が自分達で家を建てたり、アートを生み出すなど、彼らの技能の高さと逞しさを感じました。



外観



クリスチャニアバイク



クリスチャニアの街角
(絵ハガキより)

16 エグモント・ホイスコーレ学生との交流

阿部 真実

(1) 内容

- ・恋しい日本食
- ・書道パフォーマンス (2月21日)
- ・最終日の総まとめ

(2) 所感

【阿部】

日本人留学生は同世代の方がほとんどで、デンマークに留学にくるという選択をできている彼女たちを尊敬しました。とてもパワフルで、エネルギーで、話しているところからもパワーをもらえました。色んな話をした中で、言葉が通じないことで自分たちが障がい者だと感じたと話してくれたことが印象に残っています。この言葉を聞いて、誰もが障がい者になりうるし、「障がい者」というのはとても曖昧で危うい言葉だなと感じました。そのような言葉に振り回されることなく、その人個人として接する(ダウン症の〇〇さんではなくダンスが得意な〇〇さん、おしゃべり好きの〇〇さんというようにとらえる、人格を見る)ことができるように心掛けたいと思いました。

【中山】

「日本人としての自分がマイノリティであることを実感し、時に孤独との闘いです。」と、ある日本人留学生の方が話してくださいました。当校では高い語学力が求められ、さらに“自由”な校風であるが故に、人間関係をつくり、心身を維持するにも、個人の力(生きる力)が試される過酷な一面があるのだと感じました。

「個人の自由」が尊重されるデンマークでは、自己決定が重んじられる一方で、自己責任とも向き合わなければならないという現実が、留学生の方々から伝わってきました。

しかし、そんな環境下で、自分自身の葛藤と対峙しながらも、様々な国籍の学生と生活を共にする留学生の姿は、「自由さ」の苦楽を生き抜く、とても逞しい存在にみえました。

研修期間中、様々な交流企画や他国の学生とのコミュニケーションをアシストいただく等、多くのサポートをいただき、留学生の皆様には深く感謝いたします。

【山崎】

研修期間中、滞在させていただいたエグモントでは、日本人留学生の他、デンマークの学生達とも交流させていただき、多くの刺激を受けました。学生達が切磋琢磨する姿を目にして、彼らと同世代の日本の若い人達にエグモントのことを知ってもらいたいと思いました。「善い人生とは何か」をじっくり考える時間をもつ「ゆとり」が日本人にも必要だと感じました。

私たちの帰国直前の週末、書道を介した交流会で、デンマーク人の名前を漢字で表現するワークショップを行いました。日本人留学生の方々の助言で大変盛り上がり、楽しい思い出になりました。障がいの有無にかかわらず、エネルギーに溢れた学生達と交流させていただき、私も元気をもらいました。



書道を通じた異文化交流



日本人留学生のみなさん



全体の感想

【阿部 真実】

デンマークの福祉に触れることができたことが今回の一番の学びでした。福祉施設で「障がい」に対する支援が行き届いていることはもちろん、スーパーマーケットでも車いすの人が買い物しやすいようにかごに工夫がなされていたり、列車にベビーカーを乗せる時に段差があっても見知らぬ人同士で互いに助け合っていたりして（しかもそれも終わった後は何事もなかったかのように別れていた）、日常のレベルでも「障がい」に対する支援が自然になされており、本当に素敵な環境だなと感じました。

建物や街の作りなど全てがバリアフリーな訳ではなく、困っている人がいたら助けるということ個人個人が当たり前のように行っていることで、誰もが生きやすい環境が生まれているのだなと納得することができました。

いくつか訪問させていただいた場所の中でも、特にエグモント・ホイスコーレが印象に残っています。障がいがあるとなかろうと、まずはやりたいことがあるならとりあえずやってみるという考え方に影響を受けました。最初からできないと決めつけるのではなく、できるようにするためにはどうすればよいか、また何ができるかを考えることが大切だと、エグモントでの見学を通して学びました。車いすで海にも入ることができるし、ロッククライミングだってクラブに行くことだってできるということを体感できたことは貴重な経験でした。

支援者や周りの人間の想像力が乏しいせいで、利用者さんたちの自由を奪ったりその範囲を勝手に狭めてしまうことはとても悲しいことだと感じます。少なくとも私の施設ではそのようなことが少しでも減らせるように声を大にして努めていきたいと思います。

【金親 浩一】

デンマーク視察研修の10日間、ホントに沢山の事を学び感じました。ただ日本に戻り、その状況を見ると、改めてその差を感じる事が、日を追う毎に増えている気がします。

まずは政治。デンマークでは国民が国の事をしっかり考え、福祉や教育に対する予算をしっかりとかけ事を認め、様々な立場や状況の人が、人生を豊に暮らす為に国が支援する仕組みを、しっかり作っている。

そして教育。権威的にならず、多様性を認め、対話を重視しながら、問題解決に向かう意識、弱い立場の人を頑張ってる人を当たり前のように自然に助ける感覚。やはりそう言う人を育てる教育も大きな役割を持っているのかなとも思いました。

そして日本。障がいのある人は勿論の事、どうしてこんなにも弱い立場の人や、周りの人と違う人の事を認める事が出来ないのでしょうか。やはり政治と教育について、長期的な視点を持ち考え、そして実行していく時間なのではないかと強く思いました。

日本の国民全体が、金銭的というより、精神的に貧しく貧しくなっている気がしてなりません。

デンマークで学び感じた多くの事を、少しでも周りに伝え、自分も実行していく事で、自分の関わる人の人生が豊になるように、そして自分自身の人生も豊にしていけるようにしていけたらいいなあと思っています。

【中山 岳文】

デンマークでは、「社会構成主義」という思想が根づいており、“お互いはすべてを分かり合えない”ことを前提とした関係が形成されていることを知りました。世界一幸福な国として知られている同国で、わかり合うことはないという個人主義的な考え方は意外でしたが、実はこの関係性は、誰もがコミュニケーションによってお互いに意思の確認ができるという強い信念と信頼関係によって支えられていることが分かりました。

「問題解決のカギは、そこに至るまでの過程にある。」とは、ある非行少年の問題について、相手との粘り強い対話を通じて支援にあたった行政職員の方から教えていただいた言葉です。被支援者と支援者、異なる境遇・立場のうえに、双方がコミュニケーションによって歩み寄って築いてきた「関係性」が解決の糸口となる事例は強く印象に残りました。その後、様々な施設職員の方から話を聞くうち、相手の気持ちを想像する力や人の多様な受け取り方（感受性）に配慮したコミュニケーション、そして相手を信頼することは当然であるという姿勢が、仕事場だけでなく、日常の中に底流しているように感じました。

「より良い人生とはなにか？」デンマークの職員の方々は、その人が望む生き方を第一に置き、目先の生活だけでなく、その先にある幸福な人生を見据えていました。誰もが幸せに生きることについて、自分は誰かのそれを知らずに蔑ろにしていないか、また自身の考えと行動はその人が求める自己実現に寄り添っているか、常に問い直していかなければならないと思いました。

【山崎 亜弥】

ノーマライゼーションの理念発祥の地、デンマークでの研修は、福祉の原点に触れる貴重な機会でした。実際に現地を訪ねて、多くの方々にお話をうかがえたことで、デンマークの現行の福祉サービスは当事者・関係者の長年の闘いと努力の結晶であることを学びました。

普段、福祉作業所で知的障がいや精神障がいのある方々の支援員として勤務している私にとって、最も驚いたことは、デンマークでは「成人となる 18 歳で、障がいの有無に関係なく親元から独立する」ということでした。私の勤務する福祉作業所の利用者は、中高年になっても親元から通所している方が大半を占めます。研修に参加するまでは、なぜ、デンマークでは 18 歳で独立できるのか想像し難かったのですが、現地で各自に合ったサポートを受けながらグループホームやアパートから勤務先に通う彼らに出会って、その理由がわかってきました。背景にある社会保障だけでなく、住民の「共生の精神」、子どもの頃から対話を大切にする育てられ方をしていることが大きな要因だと感じました。そして、デンマークの人々は、障がいの有無にかかわらず、精神的に自立していて、前向きにやりたいことをやっている印象を受けました。「働くことの意味」「自立とは」「善い人生とは」等々、改めて考えさせられました。

